
FPC!K!K!

セールス・マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FPC！K！K！

【Zコード】

Z3615S

【作者名】

セールス・マン

【あらすじ】

習作。現在途中までなので後ほど書き足します。2月に「逝去な
さつたトウラ・サターナ様に捧ぐ……女3人、まかり通る。
理不尽な暴力描写で埋め尽くされた物語ですので、そういう表現
が苦手な方は申し訳ありませんがご遠慮ください。

「そんなこと言つたつて仕方ないでしょ。いい？　また掛けたから背凭れに身を投げ出したチャロは、手にしていた携帯電話をぽとんとシートに落とした。ビニールの座面の上でi phoneは数度軽快に跳ね、待ち受けに戻る。電話帳の一番上に乗っている男は、今頃手の中にあるお揃いの機種をじょんぼりと見下ろしているのだろう。自業自得と言う言葉も知らず。やあね、とため息交じりに天井を仰いだチャロに、ハルは象牙のようになめらかな手で緩やかにウェーブした黒髪を搔き上げ、そんなものよ、と返す。

「それでも付き合つてるあんたが悪いんでしょ」

「あんたに何が分かるつてのよ」

チャロが注文したアイスクリームはトリプル。一番上のミントの半分ほどは胃に收められ、残りは通話の間に溶けてすぐ下のバニラはおろか、最下層のチョコレートすらも汚している。ピンクのスプリンを崩れかけた緑色へ乱暴につき入れて掬うと、彼女は大きく口を開けてそれを舌の上に運んだ。小粒の前歯、溶ける毒々しいろのクリーム、唾液に濡れたプラスチック、こくりと上下する喉の動き。最後に小さく出された舌先が、薄い唇を拭つた。凝視している事を隠そともしないハルに、チャロは嫌悪の表情を浮かべた。

「レズのくせに」

「だからこそ男のこともよく分かるの」

こちらはもう既に片付いたアイスクリームのカップを脇へ避け、ハルはテープルに身を乗り出した。

「そんな男別れたら？」

「で、あんたと付き合うの？」

うえつ、と肩を竦めるチャロに、眉を少し下げる人の良い笑みを浮かべる。

「自惚れんのも大概になさい」

堅苦しい学校から解放される放課後、青いワイシャツのボタンは二つ開け、紺のスカートの腰周りは二つ折り。最近入ったらしいアイスクリームショップのアルバイトは、にきび面をした同年代の少年だった。それほど大きくないハルの胸、ネクタイまで外してしまったチャロの胸にまで視線を注ぐくらい、欲求不満らしい。

「あら、もう電話終わつたわけ？」

Fカップのたわわな胸を揺らしながら登場したバーサの胸の谷間を覗き込んでいる姿を鼻で晒す。もっとも彼女の場合、胸だけでなく尻やふとももに至るまで、身体の全てにむっちりと肉が詰まっている。チャロもまあ、背は低いがそこそこいい体をしているけれど。どすんと乱暴に隣へ腰を下ろしたバーサの横顔を見ながら、ハルは考えた。寝るんだつたらバーサのほうがいい。そんな機会は一生来ないのだとしても、值踏みはタダである。

まだ濡れた手に頬着することもなく、バーサは放置したままだつたアイスクリームを食べ始めた。ストロベリーが二つ。彼女はどんな菓子を買うときでも、ストロベリー味を選ぶ。

「あんな彼氏捨てちゃいなよ。顔だけがとりえじゃん、正直それもビミミーだし」

「そんなことない」

本日一回目の勧告を受け、チャロは神経質そうに眉を顰めた。「優しいのよ、私にだけ。喧嘩も強いし頭も悪くないし」

「それにキュートなお尻」

ハルが混ぜ返せば、バーサがあはつ、と呴のない大声で笑う。「それは言えてる」

「言えない・・・・言えてるけど、関係ない」

チャロは短い髪の向こうから、不機嫌そうに唇を尖らせた。学校のスターに見せてやりたい。成績もよく、猫を被つている優等生が見せる子供のような仕草は、日々溜まるフラストレーションの反動は、甘いものと放課後の活動へ如実に現れていた。

「可愛いのよ」

「で、今日は何？」

通路へ倒れそうなラクロスのラケットを引き寄せ、バーサは氷のような薄青色の瞳を興味の色に染めた。頭を上げた拍子に、まとめた茶色の髪が長い首筋を擦るよう肩へ流れる。

「また警察沙汰？」

「つうん、でもドジったみたい」

どろどろに溶けたバニラアイスとチョコレートアイスをスプーンでこね回し、チャロは首を振った。

「クラスメートを車のホイールキヤップで殴ったのがバレたって」「一人分の感嘆を受け流しているふりをしても、全然偽っていない。チャロは今混ぜ合わせているアイスクリームと同じ色の眼で、日も暮れつつある通りを睨んでいた。郊外に建てられた女子高の生徒をターゲットにしたアイスクリーム・ショップの周りにある商店は、他に薬局と小さなデリカテッセン程度のもの。もう少し歩けば公園もあるが、寂れていっても良いほどの通りを歩くのは今の時間、買い物帰りの主婦くらいのものだった。中流以上の人間しか住まない住宅街のど真ん中、それほど柄の悪い人間が多いわけではない。店のターゲットである人種を除いて。

「相手の親が、学校と警察には連絡しないって言つてるらしいけど」「じゃあ問題ないじゃん」

バーサが焦れたように、また髪を手で梳いた。

「何か面白いことがあつたから電話してきたんじゃないの？」

「泣き言よ。親に殴られて、部屋に監禁されてるんだって」「だつさい」

ふんと鼻を鳴らし、細く剃った眉を吊り上げる。クロスを置く場所は結局決まらなかつたらしい。柄の部分で、テーブルをこつこつと叩いてリズムを取つている。

「ほんとだつさい」

「今から抜け出すから、家に行つてもいいかつて聞かれたんだけどまだ眉間に皺を寄せたま、チャロはそっぽを向いた。

「お断り。今日は排卵日だから」

クロスとテーブルのぶつかる音が、一瞬止まった。チャロは気付いていないのか無視しているのか、視線を逸らしたままだった。ハルが振向くと、バーサの口元は一瞬の引き攣りから辛うじて脱しようとしている。何とか元の形状に戻ったのもつかの間、ふつくれと官能的な唇は、やがていやらしい笑みの形に変化した。残像を名残惜しみながら、ハルは無意識に肩を竦めると、つんと顎をそらしたままのチャロへ向き直った。

「甘えん坊つてわけ」

「あんた、絶対将来苦労するわよ」

ハルの取り成す言葉をかき消すように、バーサが甲高く作った声を上げる。

「ヒモにたかられたりしそう。そんな男やめちやいな。いつそハルと付き合つたほうがマシじゃない？」

「やだ、何であんたまでそんなこと言つわけ？」

けらけらと女子高生そのものの笑いがテーブルを支配する。まだべたつく唇から発せられたそれは、元凶となるアイスと同じくらい甘つたるぐ、冷たいようにハルには感じられた。

「でき、じつちは面白い話」

一頻り笑つた後、バーサがテーブルに身を乗り出した。重たげな胸がぐつとせり出され、天板の上でたわむ。

「さつきトイレに行つたとき、聖トマス高校の奴にコナ掛けられたんだけど」

「どんな奴？」

氣だるげに眼を細めたチャロも、勿論興味を持っている。ハルも黙つて頬杖をつき直し、窓の外に視線を走らせた。

「うーん、ヒヨロくはないけど、アメフト部つて感じでもないし」

「あそこの車で待つてる奴？」

駐車場の赤いフォードに収まっている男を顎でしゃくると、バーサはそうそうと頷いた。

「あいつ。運転席に座つてるほう」

「助手席にいるのも、似たり寄つたりつて感じね」

首を伸ばしたチャロが言つた。

「で、友達を呼んでくるつて？」

バーサはにたりと笑つただけで答えなかつた。

「いいんじやない、お誘いに乗つてあげても」

ハルは格段興味を持つでもなく相槌を打つた。言いながら、手はもう床の鞄を掴んでいる。

「待ちくたびれてるみたいよ」

ガラス越しに柔らかく微笑めば、運転席に座つていた男がそれ以降こちらを凝視する。馬鹿みたい。そう思つたが、暇潰しには丁度いい。もう立ち上がりつているチャロも、クロスを握り締めたバーサも同じことを考えていることは知つている。態度が違うだけで。

「あんたは排卵日じやないんじょ？」

ぽんとハルの背中を叩いたバーサが元気よく言つた。

「あ、どうせ何もしないか」

運転席に座る濃いブロンドの男はショーン、茶色い髪の方はデヴィッドと名乗つた。アイスクリーム・ショップを出発して30分。住宅街から離れた車は、まばらな草の生えた川べりに停車していた。日も落ち、紫の闇に包まれたこの周辺は車道から外れ、近隣では格好のデートスポットとして知られている。幸いなことに先客はおらず、月は遠慮気味な三日月。中古のフォードのボンネットが浅瀬の流れを反射して鈍く光つていた。

「それにしても、頭良いんだね」

助手席に座つたチャロの膝を見ながら、ショーンが話しかける。

「聖ペイキン高校？」

「親に勧められただけ」

彼女だけにしかできない壮絶な流し田をくれてやり、チャロは軽く喉を逸らして後部座席に語りかけた。

「あんたらもそうでしょ？」

「ええ、まあね」

ウイングウイに頬杖をついたハルが頷いた。

「それだけ。みんな同じよ」

「聖トマスの方が学力上じやん」

デヴィッドを挟んだ向かい側に陣取るバーサも、甘ったるい声を上げる。

「あたし、インテリって大好き」

「僕はバスケットボール」

腕に押し付けられた胸を明らかに意識しながら、デヴィッドは声を上ずらせた。

「で、ショーンは水泳を」

「文武両道つてわけね」

彼の眼は、絶妙のタイミングで微笑んだハルの顔に向かう。「すつごい」

「水泳つてことは、泳げるのね」

シートから身を乗り出したチャロが、ショーンの目を覗き込んだ。彼の位置からは、シャツの襟から見えたオレンジのブラも胸の谷間も、軽く持ち上げた膝のおかげで流れるスカートも、全部見えるに違いない。暗闇の中、その視線がどこに向かっているかは、後部座席からは知ることができなかつた。

「どれくらい？」

「一日に5キロくらいかな」

ショーンの唇が微かに震えている。ハンドルに乗っていたはずの手は膝に滑り降り、今にも飛び出そうと隙をつかがつていた。

「どうして？」

「泳ぐの、見たいから」

ピアノを嗜むチャロの長い指が、かたく握り締められた男の手に伸びる。ちらりと向けられた先にある川は流れも緩やかで、少なくとも見かけだけは生活排水に汚されている気配はない。

「泳いでる男の人ってセクシーだし」

助手席のドアが開く。初夏の夜風が車内に吹き込み、蒸れている空気を一気にかき回してくれた。少し名残惜しそうなそぶりを見せたものの、ショーンもまだ期待を捨てたわけではないようだつた。最後にもう一度、じつとりとした目つきでチャロを見つめ、運転席から降りた。

「あ、あたしも見たい」

バーサはまだ、胸がむかつくほどのかわなで声を崩さない。ハルもしとやかな動きで、そつとデヴィッドの腕を取る。

「行きましょうよ」

フロントガラス越しに、服を脱ぎ始めたショーンを確認する。水泳部とは嘘ではないらしく、肩の筋肉はよく発達している。バーサが鞄から取り出しているものにデヴィッドが視線を注がないうちに、ハルは彼の手を引いて車から降りた。

「うわあ、すごい」

可もなく不可もないボクサー・ショーツ一枚になつたショーンに、うつすら笑みを浮かべたチャロが近寄つていいく。彼女が歩くたび、せせらぎの音に混じつて、砂利を踏みしめる音が闇に響く。

「クロール？ バタフライ？」

早い、と思ったのは恐らくハルとバーサの両方だった。いつもはじっくりと言葉を交わして緊張を解くチャロがこんなにも急いでいるのは、恐らくアイスクリーム・ショップで交わしていた電話のせいだろう。長い付き合いだから、二人は彼女の心中で蟠る微かな苛立ちも、ぼんやりだが察することができていた。

態度では見せる逸りも、動作には何一つ支障をきたさなかつた。顔を上げたショーンの鼻先に、隠し持つていたバタフライナイフが突き付けられる。ジーンズがまだ足元に絡まっていることも幸いし、

チャロの蹴りはあつけなく青年を地面に突き転がした。

デヴィッドが驚いて駆け寄ろうとするのを腕ごと抱き込んで阻止したハルが顎でしゃくるよりも早く、バーサが折り畳み警棒を後頭部に叩きつける。膝を折ったデヴィッドを突き飛ばし、うつ伏せの背中をローファー『履きの足で踏み躡れば、初めてハルが抗議の声を上げる。

「ずるい、あんまり痛めつけるのはやめて」

「あんたこそ、自分の彼女にやりやいいじゃん」

バーサは呆れたように顔をしかめ、手の中の警棒をぐるぐると回した。

「LでSつて、サイテー」

「彼女にしたらLでSでDになるでしょ」^{ダメスティック}

茶色の髪を血でより濃く染め、デヴィッドはつなり声を上げている。彼にショーツが見えることなどお構いなしで、ハルは青年の傍にしゃがみこんだ。

「そんなの良くない」

黙つて頭を振ったバーサがデヴィッドの背中に跨り、警棒でしつかり彼の首を抑えつけている間に、ハルがポケットの中から取り出した錐を青年に見せびらかす。

「私、ひいひいお爺さんがシチリア人だったのよ」

言い聞かせていているとも独り言を呴いているとも定かでない口調で、彼女は青年の髪の剃り跡も濃い顎を切つ先でなぞつた。

「だからこれの扱いは心得てるつもり」

夢みるような漆黒の瞳の奥で、今日初めて生氣を煌めかせながら、ハルは逆手に握り締めた太い錐で、躊躇もなく青年の手の甲を貫いた。

背後から聞こえる潰れた絶叫など氣にもかけず、チャロは白いソックスに血が飛びほどショーンを蹴り続けていた。

「頭が良いですって？！」

普段の艶やかな声を極限まで高揚させ、芋虫のように丸められた腹へ集中的に爪先を叩き込む。

「ふざけんじやないわよ！　うちの偏差値は、州内でワーストテンよー。」

「悪かった」

喘ぎ喘ぎ、ショーンが何とか声を振り絞る。

「こんなとこ連れてきて」

「ほんとにそう思つてんの？　ていうか、謝つて済む問題？」

最後の一撃で仰向けに転がした体へ覆いかぶさるよう身を屈め、顎を掴む。指を濡らすのは唾液か血か、恐らく2つが入り交じったものだろ？。かざされた薄いナイフの刃が、いつの間にか雲に半分隠れていた三日月に輝いた。眼だけに激しい憎悪を湛えたチャロに、ショーンは必死で縋りつく。実際、踏まれて骨が折れているかも知れない手を、彼女の制服の袖口に伸ばした。

「金なら渡すから」

「いらない」

手を払いのけ、拭うように拳を眼下の顔に2度程走らせる。上下した軌跡に沿つて、右の顎から眼の下にかけて赤い筋がぱっくりと開いた。ショーンはもう、声すら出せないようだつた。泣いているかどうかは分からなかつたが、少なくとも上を向いた一つの黒い穴から鼻水が垂れてい。面白い。チャロは内心舌打ちした。自らの恋人の、微妙にしまりの悪い唇を思いだす。そこが可愛いし、大体彼ならば、たとえ警察官が飛んできたとしても、あの唇を不敵に尖らせていふことができるに違ひない。そういえば彼は何をしているのだろうか。電話を切られて、すっかりし�ょげきつているのではないか。明日電話して、慰めてやらなければ。

ぼんやりと弄っていたナイフの刃先は、浅く青年の顔を傷つけ続けている。これでは失礼だと思い、踏みつけていた掌から足を離す。「泳げるって言つてたっけ」

肉が割れている頬を指で撫でると、低いうめき声が上がる。ついでにオレンジ色のマニキュアを塗った爪を食い込ませれば、悲鳴に変わる。彼氏のものとは似ても似つかないエメラルド色の瞳は、やはり涙で潤んでいた。

「何なら、泳いで逃げてみる？」

手を離せば顔が落下し、額を地面にぶつける。チャロは三歩後ずさり、両腕を組んで待ち構えた。男はなかなか動かない。爽やかな水音に混じり、背後から聞こえる呻きと、ハルの囁き声が、霧の出だした川原を支配いている。あと10数えても起き上がりなかつたら、手助けして水の中に蹴込んでやろう。湿気のせいでぺたりと寝てしまつた髪を無造作に払い、チャロは青年の動きを見守つていた。幸か不幸か、ショーンはタイムアップ寸前に肩を震わせた。そろそろと首を持ち上げ、チャロの顔を見上げる。先ほどはすっかり消えていたと思われた生氣は、瞳の中に再び戻りつつあった。思ったほど意気地なしというわけでもないらしい。

ショーンは彼女と見詰め合つたまま、ゆっくりと立ち上がる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615s/>

FPC!K!K!

2011年4月10日00時10分発行